

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2005 年度～2008 年度
 課題番号：17730389
 研究課題名 (和文)：相互主観性から捉えた文化間移動に伴うエスニック・アイデンティティの形成過程
 研究課題名 (英文)：Process of Ethnic Identity Formation Through Migration Among Different Cultures From the Aspect of Mutual Subjectivity
 研究代表者：竹尾 和子 (TAKEO KAZUKO) 東京理科大学・理学部教養学科・講師
 研究者番号：30366421

研究成果の概要：

本研究では、日本在住の外国人を対象にインタビュー調査と質問紙調査を行い、双方の調査結果を往還しながら、彼らのエスニック・アイデンティティの形成過程を明らかにすることを試みた。これにより、エスニック・アイデンティティが自他の相互主観性のせめぎ合いの中で社会的に構築される実体として浮き彫りにされ、エスニック・アイデンティティの既定要因としての個人内要因と社会的要因の特定、および、これらの要因の相互関連性が明らかにされた。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2005 年度 | 1,200,000 | 0 | 1,200,000 |
| 2006 年度 | 800,000 | 0 | 800,000 |
| 2007 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| | | | |
| 総計 | 2,800,000 | 240,000 | 3,040,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：エスニック・アイデンティティ 在日外国人 社会構築主義 相互主観性
名のり ふるさと性

1. 研究開始当初の背景

さまざまなエスニック・グループから構成される世界のあらゆる国において、エスニシティに関わる問題は重要なものとして扱われてきた。このように、日本においても、外国人の入国は増加の一途をたどり、エスニシティの問題は今や我が国において、取り組むべき重要な問題になっている。また、在日外国人のエスニシティの問題について検討することは、日本の教育や社会のあり方を考える上でも、必要な作業であると考えられる。

心理学の領域においては、文化と心の関係を扱う心理学研究の主流として、比較文化心理学と文化心理学が挙げられる。比較文化心

理学は、文化間の差異に研究の主眼がおかれ、その差異が形成されるまでのプロセス、つまり、個人の文化化の過程については、ほとんど扱われてこなかった。対して、ヴィゴツキーなどのロシア心理学派を主流とする文化心理学は、個人が文化的実践活動に参入することで、個人の心理発達が歴史的文化的媒介物を介して展開される側面に 관심이向けられてきた。しかし、その所産としての、文化的特質 (比較文化心理学で検討されてきた文化間の差) についてはほとんど扱われてこなかった。文化的差異に主眼を置く比較文化心理学と、文化化のプロセスに主眼を置く文化心理学の溝は埋められないまま、現在に至っ

ている。本研究では、個人が自文化と他文化の差に直面し、そのギャップを乗り越えようと、主体的に自己や文化についての認識やそれに伴う感情や動機を変容する過程に注目する。そこには、差を扱い続けてきた比較文化心理学のテーマと、文化化の過程を扱い続けてきた文化心理学のテーマが、具体的に織り込まれている。その点において、異文化接触に伴う心理的变化を解明するという本研究の試みは、従来の比較文化心理学と文化心理学の溝を埋める可能性を持つ、注目すべきテーマと言えよう。

日本における異文化接触に関する心理学研究を概観すると、主に、(1) 日系移民の研究、(2) 海外駐在員・海外子女・帰国子女といった日本人の適応に関する研究(綾部, 1982; 江淵, 1982; 小林, 1981; 箕浦, 1984; 斎藤, 1988)、(3) 在日外国人に関する研究(長井, 1988; 井上・伊藤, 1997; 田中・藤原, 1992; 周, 1993; 1995; 平・川本・慎・中村, 1995; 辻本, 1998; 中原, 2003; 早矢仕, 1997; 山崎, 1994a; 1994b; 藤谷他, 2001; 中村他, 1994; 長井, 1988)に大別される。いずれも今日的で重要な問題であるが、とりわけ、(3) 在日外国人に関する研究は、日本で生活する外国人の問題に留まらず、そのホームカルチャーとしての日本文化のあり方や、そこに生きる日本人のあり方にも関連する問題である。在日外国人の研究のうち、心理学的研究が盛んになされているテーマが、留学生といった短期滞在者の異文化環境における適応問題である。留学生の適応に影響する要因として、日本語能力の修得度(上原, 1988)、日本社会特有のソーシャル・スキルの獲得度(田中・藤原, 1992)、文化受容態度(井上・伊藤, 1997)、自己認知や自・他文化への態度(早矢仕, 1997)、対人関係の広がり(高井, 1991)や留学生に対するソーシャル・サポート(周, 1995)などが挙げられてきた。また、留学生・就学生に関する在日態度や在日イメージとその規定要因に関する検討(山崎, 1994a; 1994b,)や、アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ(藤谷他, 2001)などもなされており、日本に在住する留学生・就学生といった短期滞在者の適応やそれをめぐる種々の問題について多角的な理解がなされつつある。一方、永住するエスニック・グループを対象とした研究も若干ではあるがなされつつある(中村他, 1994; 中原, 2003; 辻本, 1998; 平他, 1995)。中でもエスニック・アイデンティティに関連する研究としては、平他(1995)の“名前”の使い方の規定要因に関する研究や、辻本(1998)の文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程に関する研究が挙げられる。留学生・就学生などの短期滞在者の研究では、主にホームカルチャーへ

の適応の問題が研究テーマとされることが多いのに対して、永住者を対象とする研究において、エスニック・アイデンティティの問題が取り上げられる。これは、異文化への滞在が当事者の人生において、時間的にも、その意味的重さにおいても、ウェイトがかかるものであるほど、エスニック・アイデンティティの問題が大きく立ち現れることを示唆する。それゆえに、この問題は種々の要因と複雑に関連している可能性があり、さまざまな観点からの検討が必要である。しかし、日本におけるエスニック・アイデンティティに関する心理学的研究は未だ数が少なく、今後の研究が求められる。

従来のエスニック研究を概観すると、集団同士の相互関係性という観点から検討されることが比較的多かった。対して、エスニック・アイデンティティは、Phinney(1989, 1990)の研究に代表されるように、個人内で生じるダイナミズムとして描かれることが圧倒的に多く、日本においても同様の傾向が見られた。自国を離れ日本に暮らす在日外国人にとって、「私は何人なのだろうか」という、エスニック・アイデンティティへの根源的な問いが、身近な問題として立ち現われ、時にその答えの模索に多大な努力を払うことがしばしばである。多くの在日外国人は、自身に向けられる日本人からの態度や評価を目の当たりにし、時に戸惑い、時に葛藤し、それに自分自身を照らし合わせながら、自身のエスニック・アイデンティティを模索する。まさに、エスニック・アイデンティティとは、日本人と在日外国人双方による主観性のせめぎ合いの中で立ち現れる問題であり、この“相互主観性”の中にこそ、エスニック・アイデンティティ形成の本質があると考えられる。以上を踏まえ、在日外国人と日本人双方による“相互主観性”の観点から、在日外国人におけるエスニック・アイデンティティの形成過程について検討することを着想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本に在住する外国人のエスニック・アイデンティティの形成過程について、それが在日外国人と日本人との相互主観性のせめぎ合いの中において立ち現れるという観点から明らかにすることを目的とする。また現象の解明にあたり、本研究では質問紙調査とインタビュー調査を実施する。表面的であるが大規模なデータ収集が可能な質問紙調査と方法と小規模でもインテンシブなデータ得られるインタビュー調査のそれぞれのデータを往還し、多層からなるデータを収集、分析することで、エスニック・アイデンティティについて総合的に描き出すことを試みる。

3. 研究の方法

平成 17 年度は、日本在住の外国人のエスニック・アイデンティティをめぐる心的状況の全容を把握するために、非構造化インタビュー調査を実施した。平成 18 年度では、平成 17 年度のインタビューで明らかにされたことを踏まえ、よりインテンシブな質問項目を提示した。平成 20 年度には、2 年間で明らかにされてきた現象について、その一般性を検討するための質問紙調査を実施した。特に、インタビュー調査により、現在の日本での生活に大きな影響を与えることが見出された“ふるさと性”（自身のふるさとについてのイメージや感情）に主眼を置く調査内容とした。各年度の調査方法の詳細は下記のとおりである。

(1) 平成 17 年度：インタビュー調査

- ①対象者：韓国，中国，台湾，インドネシア，タイ，イスラエル，アメリカの各国出身者，計 35 名。
- ②インタビュー内容：自身のエスニシティの来日による変化，変化の理由として考えられる日本での経験（主に，日本人からの態度や評価など）など，思いついたことを自由に回答してもらった。

(2) 平成 18 年度：インタビュー調査

- ①対象者：中長期日本滞在の韓国出身者，計 24 名。
- ②インタビュー内容：主に，エスニック・アイデンティティの形成に関連するいくつかの事項について質問をした。具体的には，a. 名のり，b. “ふるさと性”，c. 子育ての仕方，d. エスニシティへの意識，e. 自文化への意識，f. a～e の状況や相手との関係性等の変化など。

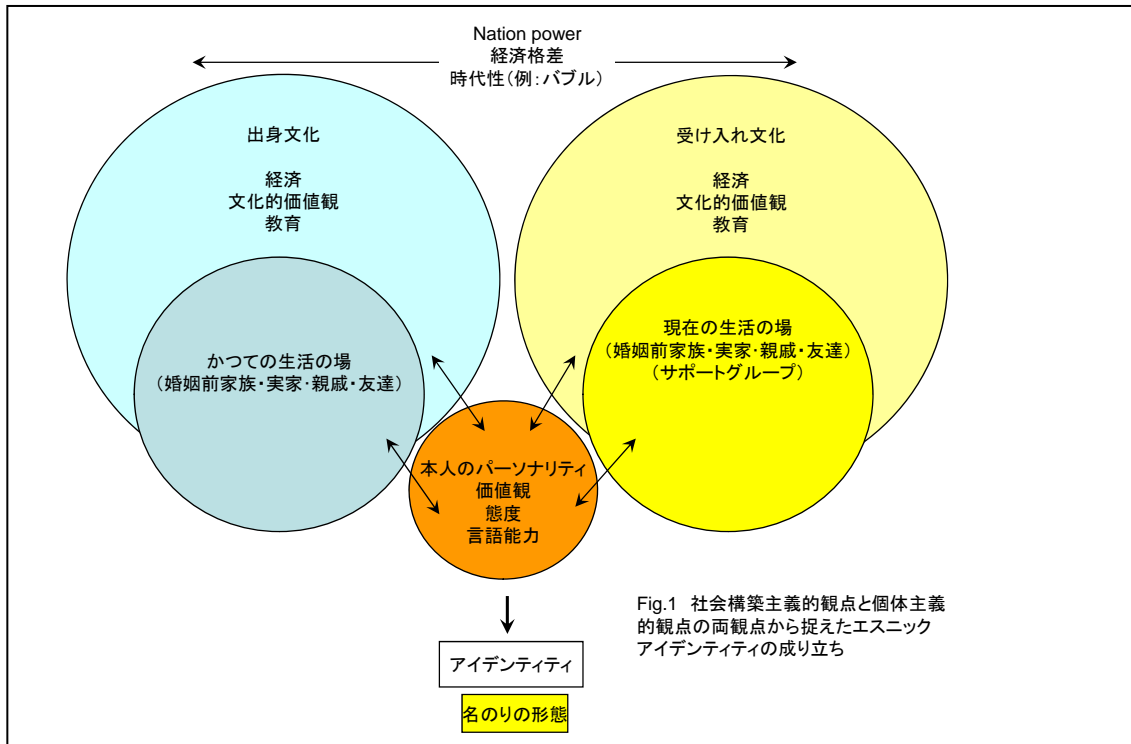
(3) 平成 20 年度：質問紙調査

- ①対象者：日本在住の韓国出身者 100 名。
- ②質問紙調査内容：調査の結果を精査し，特に“ふるさと性”と他の要因との関係に関する仮説を設定した。仮説に基づき作成した質問紙の内容は，a. “ふるさと性”の内容（イメージや感情），b. “ふるさと性”の現在の日本の生活（人間関係等）に対する影響，c. ふるさとの生活と現生活との比較（どちらに好意的イメージを持っているか），d. 日本文化と韓国文化への志向性，e. 現在の日本の生活への適応度，f. 自分の国籍等に関するイメー

ジ等により構成される。質問紙調査は日本語版と韓国語版を作成した。

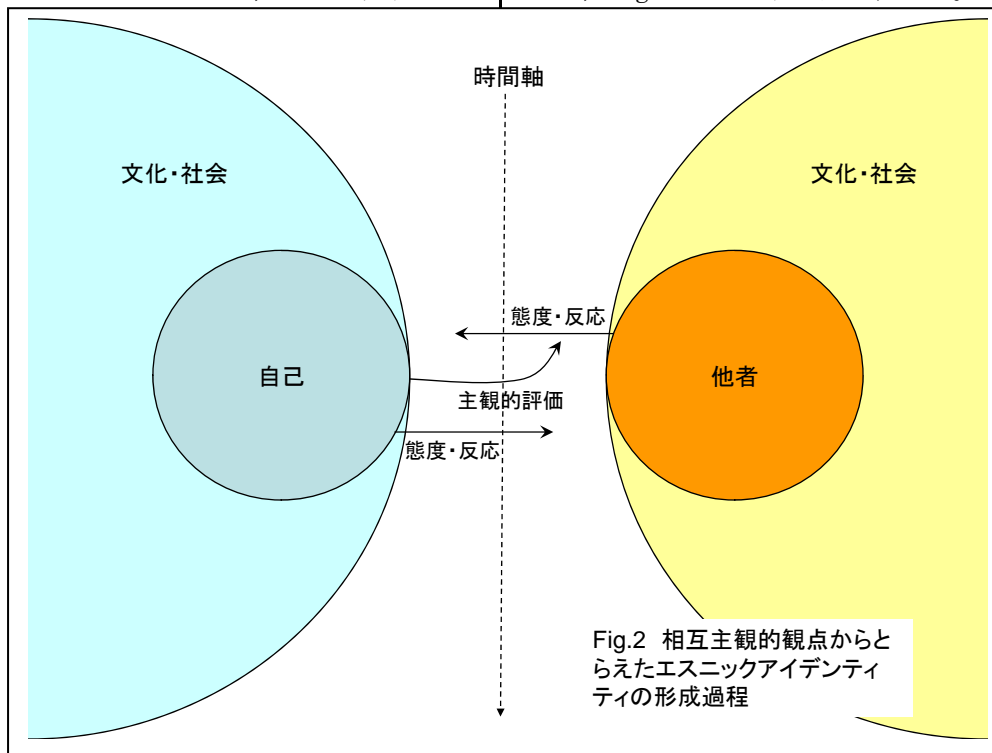
4. 研究成果

- (1) エスニック・アイデンティティ関連の文献レビュー：これまでのエスニック・アイデンティティに関する研究を整理した。これにより，従来の欧米を中心に進められてきたエスニック・アイデンティティ研究は，個体主義的な観点が主流であったことを示し，本研究の立場が，社会や他者との関係性の中で形成されるエスニック・アイデンティティに注目するという立場の位置づけを明確にした。
- (2) エスニック・アイデンティティを捉える視点について：インタビュー調査により得られたプロトコルにより，エスニック・アイデンティティを捉える視点として，名のりの形態，自国の文化への愛着，国籍，宗教等が有効であることが示された。とりわけ，日本でどのように名のかという決断は，自身のエスニック・アイデンティティを如実に反映することが明らかにされた。
- (3) 名のりの形態とその既定要因：エスニック・アイデンティティのエンブレムとして見いだされた名のりに関する要因として，次の 6 要因が抽出された。①出身文化の名前への愛着・思い入れ，②家族関係（重要他者の価値観や本人と関係性），③利便性 1 / 日本の外国名への非受容性，④利便性 2 / 名前の形態（音韻形態・文字形態），⑤：流行（例：「韓流」），⑥国籍（帰化の有無）。これらの要因には，個人の心理的傾斜や個人史を内包するような要因と，対人的状況や社会的状況を反映するような要因が存在することから，エスニック・アイデンティティ研究において，従来の欧米におけるエスニック・アイデンティティ研究に主流であった個体主義的立場に加え，社会構築主義的立場を取り入れた両面からの解明が必要であることが示唆された。
- (4) 社会構築主義的観点と個体主義的観点の両観点からエスニック・アイデンティティの成り立ち：インタビューのプロトコルから，両観点から捉えられるエスニック・アイデンティティの成り立ちの全体像をまとめ，Figure1 のように図式化した。



(5) 相互主観性の観点から捉えたエスニック・アイデンティティの形成過程：インタビューのプロトコルから、自己と他者の

相互主観性のせめぎあいの中でのエスニック・アイデンティティの形成過程を析出し、Figure2のように図式化した。



(6) 質問紙調査から見出された“ふるさと性”：質問紙を配布した100名のうち、50名に対してすでにデータ整理・記述統計レベルの分析が完了した。以下に、その分析結果の概要を述べる。

①「ふるさとのイメージ」について：Table1に示した29項目について，“ふるさと”の記憶の中で、どのくらい強いイメージ

として残っているかを、「1. ぜんぜん強くない—5. 非常に強い」の5件法で回答してもらった。その平均値(table1)によれば、上位10位に位置する項目を見ると、「友だちとのよい思い出」「母とのよい思い出」「兄弟・姉妹とのよい思い出」などの近しい他者との良い思い出、「我が家の風景」「学校の風景」「家の周りの風景」「通学路

の風景」など、生活場面の風景、「我が家のキムチの味」「我が家のジョンの味」などの韓国特有の家庭の味、「旧正月の思い出」などの子どもたちの韓国文化的行事など、人間関係、風景、味、行事といったさまざまな側面から“ふるさと”のイメージが構成されていることが示された。また、下位7個がすべて「嫌な思い出」であることから、ふるさとのイメージには不快な記憶が除外される傾向にあると言えよう。

Table1 「ふるさとのイメージ」各項目の平均値（降順）

| | |
|----------------------|------|
| 友だちとのよい思い出 | 4.32 |
| 我が家の風景 | 4.22 |
| 母とのよい思い出 | 4.10 |
| 我が家のキムチの味 | 4.08 |
| 学校の風景 | 4.00 |
| 家の周りの風景 | 3.94 |
| 兄弟・姉妹とのよい思い出 | 3.90 |
| 我が家のジョンの味 | 3.88 |
| 旧正月の思い出 | 3.86 |
| 通学路の風景 | 3.86 |
| 我が家のトクツクの味 | 3.82 |
| お盆の思い出 | 3.82 |
| 学校や幼稚園・保育園の先生とのよい思い出 | 3.51 |
| 父とのよい思い出 | 3.44 |
| 誕生日の思い出 | 3.20 |
| 遊び場の風景 | 3.19 |
| お墓参りの思い出 | 3.14 |
| ユニノリで遊んだこと | 3.12 |
| 親戚とのよい思い出 | 3.10 |
| クリスマスの思い出 | 3.10 |
| 祖父母とのよい思い出 | 3.02 |
| たこあげで遊んだこと | 2.94 |
| 友だちとの嫌な思い出 | 2.44 |
| 父との嫌な思い出 | 2.39 |
| 親戚との嫌な思い出 | 2.35 |
| 兄弟・姉妹との嫌な思い出 | 2.10 |
| 学校や幼稚園・保育園の先生との嫌な思い出 | 2.09 |
| 母との嫌な思い出 | 2.04 |
| 祖父母との嫌な思い出 | 1.84 |

②「ふるさとの今の自分への影響」について：Table2に示した9項目について、“ふるさと”の記憶が今の自分にどの程度影響を与えるかを、「1. ぜんぜんあてはまらない—5. 非常にあてはまる」の5件法で回答してもらった。その平均値(table2)によれば、「自分の性格」「子育て観」「家族観」「生活信条」など、パーソナリティや価値観など、人格の骨子に当たる部分に“ふるさと”の記憶が関与していることが見出された。次いで、他者とのつきあい方に“ふるさと”の記憶が関与していることが示されたが、初対面の人よりも、親しい人との人間関係に強い影響を与えていること、親しい人とのつきあいおよび初対面の人とのつきあいの中では、日本人よりも韓国人との人間関係においてふるさとの記憶が関与していることが示された。初対面の人との付き合いよりも親しい人とのつきあいにおいて「その人らしさ」がにじみ出て、

そのような関係においてこそ、“ふるさと”の記憶が影響力を増すことが示された。以上により、“ふるさと性”がその人のその人らしさの深いところに入り込んでいることが明らかにされた。

Table2 「ふるさとの今の自分への影響」項目平均値（降順）

| | |
|-----------------------------|------|
| 今の自分の性格 | 3.73 |
| 「子どもをどのように育てたいか」についての自分の考え方 | 3.63 |
| 結婚後の家族関係 | 3.63 |
| 自分の生活信条 | 3.33 |
| 親しい韓国人とのつきあい方 | 3.30 |
| 自分の仕事・学業・その他の活動など、没頭していること | 3.15 |
| 親しい日本人とのつきあい方 | 3.00 |
| 初対面の韓国人とのつきあい方 | 3.00 |
| 初対面の日本人とのつきあい方 | 2.85 |

③「今の生活とふるさとの生活との比較」について：Table3に示した8項目について、今の生活と“ふるさと”での生活を比較してどちらがよいかを「1. 今の方がずっとよい—5. ふるさとの方がずっとよかった」の5件法で回答してもらった。得点が高いほど、“ふるさと”の方がよかったと考えていることになる。その平均値(table3)によれば、「友人とのつきあい」「日々の幸福感」の得点が高く、「どちらともいえない」の3点を上回り、“ふるさと”での生活の方がよかったと評価する傾向が高かった。対して、「生活の便利さ」「社会的地位」の得点は低く3点を下回り、今の生活の方が良いと評価する傾向が高い。「自己肯定感や自己信頼感」については、相対的に低い値を示しているが、自己肯定感や信頼感は思春期や青年期での著しい低下など発達の時期の要因が深く関与している可能性があり、“ふるさと”での生活か今の生活かにかかわらず、年齢を重ねた現在の自分の方がこれらの得点が高くなる可能性もある。総じて、今の生活の方がよかったと評価された項目は、「生活の便利さ」「社会的地位」「経済的豊かさ」「将来への展望」など、現実生活に密着した事項が占めるのに対し、“ふるさと”の方がよかったと評される項目は「友人とのつきあい」「日々の幸福感」など、いわば「心の潤い」に関連する事項が占めていた。

Table3 「今の生活とふるさとの生活の比較」項目平均値（降順）

| | |
|-------------|------|
| 友人とのつきあい | 3.60 |
| 日々の幸福感 | 3.14 |
| 家族との関わり | 2.98 |
| 将来への展望(夢) | 2.92 |
| 経済的豊かさ | 2.92 |
| 社会的地位 | 2.58 |
| 自己肯定感や自己信頼感 | 2.53 |
| 生活の便利さ | 2.35 |

- ④「韓国・日本への傾倒」について：Table4に示した4項目について、どのようにしたいかを、「1. 韓国文化への傾倒、2. 日本文化への傾倒、3. 両文化への傾倒、4. こだわらない」のいずれかを選択して回答してもらった。なお、選択肢は質問項目に合わせて表現を変えており、たとえば、「自分の子どもに名前をつけるとしたら（子どもがいる場合は、どのようにしていますか。）」であれば、「1. 韓国の名まえをつけたい（つけている）、2. 日本の名まえをつけたい（つけている）、3. 韓国でも日本でも通用する名前をつけたい（つけている）、4. 韓国の名前でも日本の名前でもどちらでも構わない」という選択肢を設けた。各国目の選択肢の選択頻度（割合）（table4）によれば、いずれも日本文化への傾倒が50%を上回っている。また、「両文化への傾倒」「こだわらない」を選択した人はおらず、韓国か日本かといった意識は明確に分化していると言えよう。今後、各文化へ傾倒している人の“ふるさと”をめぐる意識の違いについて分析する予定である。

Table4 韓国・日本への傾倒

| | 韓国文化への傾倒 | 日本文化への傾倒 | 両文化への傾倒 | こだわらない | 無回答 |
|--------------------|-------------|-------------|-----------|-----------|------------|
| 自分の子どもに名前をつけるとしたら | 18 (36%) | 25 (50%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 7 (14%) |
| 子育てをするなら | 14 (28%) | 34 (68%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 2 (4%) |
| どのようにお正月を過ごしたいですか？ | 4 (8%) | 44 (88%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 2 (4%) |
| 来はどこに住みたいですか？ | 8 (16%) | 35 (70%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 7 (14%) |

注 値は選択頻度（対象者群に対する割合）

- ⑤「日本での生活における意識」について：日本での生活を問う29項目について、自分にどの程度あてはまるかを、「1. ぜんぜんあてはまらない—5. 非常にあてはまる」の5件法で回答してもらった。その得点を対象に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。分析の過程では因子負荷量の低い項目を一部削除し、スクリープロットと解釈可能性から9因子解を採択した。「日本適応への困難感」「日本人との交流可能感」「韓国人であることへの喜び」「ふるさとへの肯定感」「韓国大切感」「日本人からの拒否経験」「日本人への傾倒」「日本生活への満足感」「韓国人であることへの意識」といった因子が抽出された。このうち、「韓国人であることへの喜び」「韓国人であることへの意識」はエスニック・アイデンティティの重要な側面を担うものと考えられる。また、「日本適応への困難感」「日本人との交流可能感」「日本人からの拒否経験」「日本人への傾倒」「日本生活への満足感」は日本社会・日本人との関係性

を反映する。これらの回答傾向と“ふるさと性”の回答傾向との相互関係性を分析することで、個人の内側にある“ふるさと性”および「日本社会や日本人との関係性」にどのように規定されながらエスニック・アイデンティティが成立するかを明らかにし、エスニック・アイデンティティの形成過程における個人内要因と社会的要因の関係性に関する一般的知見を見出したい。これは従来の欧米におけるエスニック・アイデンティティ研究に主流であった個体主義的立場に加え、社会構築主義的立場を取り入れた両面からの解明につながるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 竹尾和子, エスニック・アイデンティティ研究の視座, 東京理科大学紀要 教養篇, 38, 229-244, 2006
- ② 竹尾和子, 異文化接触における宗教—日本で暮らす外国人のインタビューから—, 東京理科大学紀要 教養篇, 39, 209-224, 2008

〔学会発表〕（計3件）

- ① Kazuko Takeo, Ethnic Identity Constructed in the Japanese Culture—Results of Interviews With Chinese, Koreans, Thais, and Indonesians—, Paper presented at Society for Research on Identity Formation Thirteen Annual Conference, March 23, 2006, San Francisco, California, U. S. A., 2006
- ② Kazuko Takeo, Effects of residency in Individualistic or Collectivistic Culture Upon Japanese Adolescents' Relation With Parents, Paper presented at the 11th Biennial Meetings of the Society for Research on Adolescence, March 23-26, 2006, San Francisco, California, U.S.A., 2006
- ③ Kazuko Takeo and Rie Yabuki, The Ethnic Identity of Foreign Residents in Japan: The Third Approach to Understand the Relationship Between Culture and Mentality, Paper presented at the 19th Biennial Meetings of the International Society for the Study of Behavioural Development, 2006

6. 研究組織

- (1) 研究代表者 竹尾和子（東京理科大学・理学部教養学科・講師）

研究者番号：30366421